

2015年7月7日(火)～8月30日(日) 東京国立博物館 本館15室



1. 飲食養生鑑 Inshoku Yojo Kagami (Functions of organs and effects of poor diet explained)

歌川芳綱筆 紙本色摺 43.5×32.5cm 江戸時代・19世紀 QB-11047 徳川宗敬氏寄贈

中国の五行説によって色分けされた臓腑の中で、人々が必死で働いています。

日本の医学は、江戸時代中期に蘭学とよばれた西洋の学問の導入によって飛躍的に進歩しました。それに対し、古くから日本で行なわれていたのが「養生」です。現在、予防医学の観点から、さまざまな養生のあり方が注目されています。

この展示では、日本最古の医学書である『医心方』や、東洋医学の基礎となった「つぼ」を示す銅人形、人々が親しんだ養生書のほか、蘭学の影響を受けた人体解剖模型、シーボルトの携帯用医療器具など、養生と医学との関連を考える上で重要な資料をご覧くださいと思います。

Medical science in Japan made a rapid progress during the mid-Edo period with the introduction of Western knowledge, namely Dutch studies. At the same time, a unique tradition for keeping health was also practiced in the country. Today, this tradition of wellbeing is being recognized from the aspect of preventive medicine.

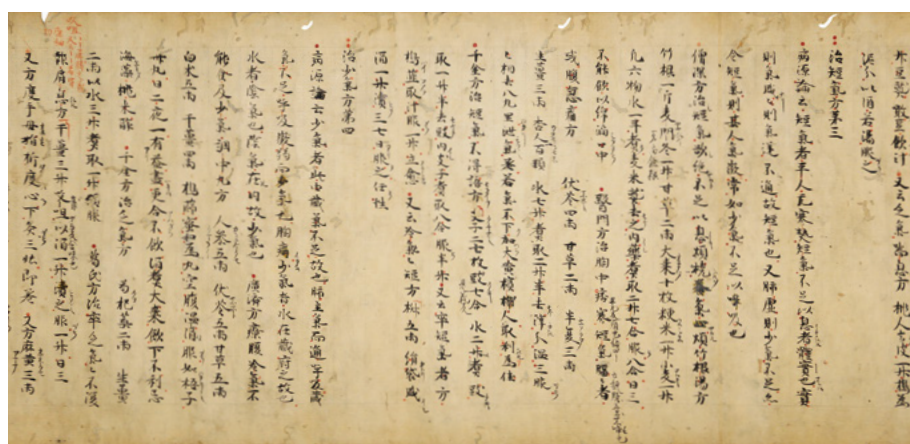
Along with *Ishinpo*, the oldest Japanese book of medicine, this exhibition introduces bronze figurines indicating acupuncture points which represent a fundamental concept in Oriental medicine, as well as domestic books for wellness. Anatomical models showing influences from Dutch studies, portable medical instruments used by Philipp Franz von Siebold, and other important materials in knowing the relations between Japanese traditional ideas on wellness and Western medical science are also on view.



隋・唐の医学を伝える

『医心方』30巻は、永観2年(984)に鍼博士の丹波康頼(912~995)が、隋・唐の医書百数十巻を参照して著したもので、日本最古の医学書です。本書の典拠がほとんど失われているだけに、医学史上の価値

はきわめて高いといえます。左下の写本は、長い間、宮中に秘蔵され、16世紀に正親町天皇から宮中の侍医である半井瑞策に与えられたものです。



2. 国宝 医心方 巻第9 咳嗽部
Ishinpo (Ancient medical book), Vol.9 (Cough and phlegm)
丹波康頼編 紙本墨書 27.6×1185.0cm 平安時代・12世紀 B-3178-9
呼吸器疾患の中で、短気の治療法にもなっています。



3. 国宝 医心方 巻第22 婦人部 Ishinpo (Ancient medical book), Vol.22 (Gynecology) 丹波康頼編
紙本墨書 27.4×1176.0cm 江戸時代・17世紀 B-3178-22
妊娠中の病気の治療法などの説明には墨書淡彩の図が加えられています。これは『医心方』唯一の図です。

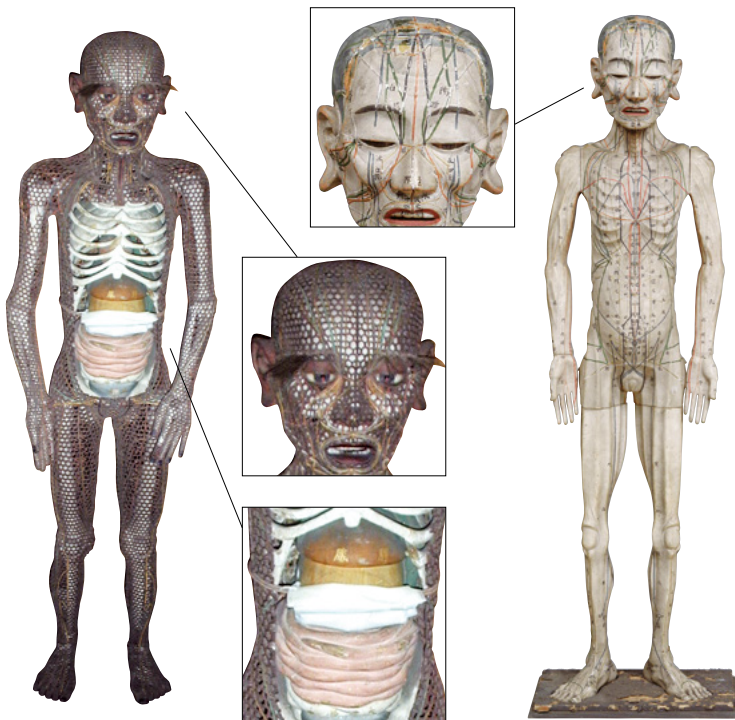


東洋医学にみる人体の仕組み

東洋医学の場合、「効く」かどうかという徹底した実用性を重視すること、疾病そのものよりも「病んでいる人」を治すことを目的としています。その基本的な考え方は、人体には経絡という脈管があり、その中を「気」が循環して生理機能をつかさどっているというものです。さまざまな物質代謝や精神活動と関連した機能単位として内臓をとらえ、病んだときにあらわれる徴候を重視します。

たとえば、灸は江戸時代に病気の治療や養生の方法として庶民の間に広まりました。体表の特定の部位である経穴(俗につぼ)を刺激し、多くの場合そこから離れた部位にある病変を治癒させるものです。

中国では宋の時代に銅人形とよばれる人体模型がつくられましたが、日本では17世紀に、紙製や木製の銅人形に経絡や経穴を付して学習する方法が確立しました。寛文2年(1662)に岩田伝兵衛が製作した銅人形は、表面に経絡を引き、骨格や内臓の様子が見えるのが特徴です。右側の木製の銅人形は、貞享元年(1684)に幕府の奥医師竹田定快(1642~1704)が、仏師康野忠房に製作させたものです。左側の銅人形と、顔つきや耳の形状などがよく似ているため、これを模倣して製作したとする説もあります。ただし、経絡や経穴の描き方には若干の相違がみられます。



4. 重要文化財 銅人形
Model of Human Body for Study of Acupuncture
岩田伝兵衛作 金属・木製 高143.9cm
江戸時代・寛文2年(1662) C-544 松平頼英氏寄贈

5. 銅人形 Model of Human Body for Study of Acupuncture
康野忠房作 木製 高109.7cm
江戸時代・貞享元年(1684) C-542



養生のあり方

江戸時代の代表的な養生書としては、正徳3年(1713)に貝原益軒(1630~1714)が著した『養生訓』があげられます。ただし『養生訓』は内容が厳格であったため、庶民の間では和歌、紀行文、物語の形式を用いた養生書が受け入れられるようになります。『巨登富貴草』は、不老長寿の霊薬を求め、フランス製のリュクトスロープに乗って旅をする主人公の安在に、色欲・大酒・過食の実情を見聞させ、それぞれの害を説きながら、読者に日々の節制の大切さを伝える物語です。万民が色欲におぼれる「女色国」、常に酒宴をしている「大酒国」などを訪れ、巨人のいる「竜伯国」では、巨人の体内に迷い込んで探検しています。

著者は幕府の医官で、明和2年(1765)に「医学館」を創設した多紀元孝の子元恵(藍溪)です。多紀氏は『医心方』をつくった丹波康頼の後裔で、日本の漢方医の中心的存在であったため、しだいに盛んになってきた西洋医学に対抗する意味もあり、こうした書物を著したものと考えられます。



6. 巨登富貴草 上巻 Kotobuki gusa (Novel about maintaining one's health), Vol. 1
多紀元恵著 栗田口蝶斎筆 紙本着色 29.9×1495.5cm
江戸時代・18世紀 QB-10526-1 徳川宗敬氏寄贈
リュクトスロープは2人乗りの飛行船で、長さは3.6m、幅1.2mです。



7. 巨登富貴草 下巻 Kotobuki gusa (Novel about maintaining one's health), Vol. 2 多紀元恵著 栗田口蝶斎筆 紙本着色
30.0×1681.2cm 江戸時代・18世紀 QB-10526-2 徳川宗敬氏寄贈
主人公が巨人の口から飛び出したところです。

飲食による体内の動きを図解したものに歌川芳綱(生没年不詳)筆『飲食養生鑑』があります。健康管理は飲食と房事を組み合わせて考えられており、どちらも度を過ぎてはいけないという当時の人々の考え方を知ることができます。

また寛政10年(1798)に、黄表紙の作家である滝沢(曲亭)馬琴(1767~1848)が著した『鼻下長生薬』は「人の病の根本はなんだろうと、よくよく考えてみたところ」ではじまり、人には、「五欲」という病があって、色と酒がそのお頭であるといえます。挿絵には、「欲」の顔ををした大工が、鉋や手斧で命を削っている様子が描かれています。身の行ないを慎むことで病気を防ごうという考え方があらわれています。

ところが、文化・文政期(1804~1830)以降、庶民も生活にゆとりが出てきて、お金さえ出せば、料理屋でおいしいものを食べ、酒を飲むことができるようになりました。たとえ養生書であっても、節制だけを説いてはいられなくなったのです。しだいに心豊かに暮らすこと、つまり「よく生きること」を目指すようになりました。天保13年(1842)に水野沢斎が著した『養生弁』では、「飲み食いも色も浮世の人の欲、程よくするが養生の道」とあります。文政8年(1825)、江戸の小説家である八隅景山の『養生一言草』は、人間の発達に応じた教養や養生の関係について、とくに「生活の病」にかからないための方法を説く点が注目されます。やがて、自由に躍動する感情の働きこそ、健康の第一歩との考え方が登場します。



8. 鼻下長生薬 Hana no shita nagaiki no Kusuri (Illustrated book on causes of disease)
滝沢(曲亭)馬琴著 紙本墨摺 18.6×13.0cm 江戸時代・寛政10年(1798) QB-7828
徳川宗敬氏寄贈



9. 養生弁 巻上 Yojoben (Book on Wellness), Vol. 1
水野沢斎著 紙本墨摺 22.3×15.5cm
江戸時代・天保13年(1842) QB-3323-1 徳川宗敬氏寄贈



人体に関する知識の普及



10. 覆載万安方 巻第54

Fusai mananpo

(Book on medicine), Vol.54

梶原性全著 坂璋筆 紙本着色

27.0×19.1cm

江戸時代・天保5～6年(1834～35)

QA-58-50



11. 解体新書 図版編

Kaitai shinsho

(Book on Western anatomy), Illustrations

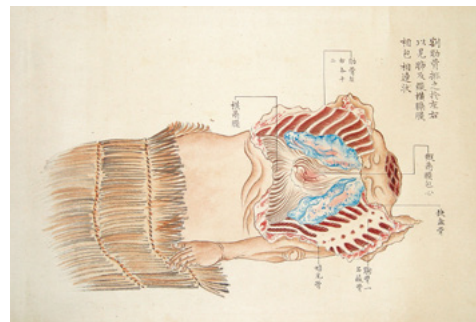
杉田玄白他訳 紙本墨摺 26.5×17.7cm

江戸時代・安永3年(1774) QB-4555-1

『覆載万安方』は、鎌倉時代を代表する医師の梶原性全(1266～1337)が、当時の最新の医学を子孫に伝えるために編纂したものです。性全著の『頓医抄』の中の「五臓六腑形并十二経脈図」を収め、彩色も加えています。

つぎに『解体新書』は杉田玄白が宝暦4年(1754)に江戸で行なわれた人体解剖の実見をきっかけに、安永3年(1774)、ドイツ人クルムスの解剖書『ターヘル・アナトミア』を翻訳し、出版したものです。

そして『解体図』は、天明3年(1783)、京都伏見で小石元俊の指導の下に行なわれた解剖の様子を詳細に記録した『平次郎臓図』とよばれる解剖図などをもとにしています。



12. 解体図

Anatomy of Human Body

三浦義信他筆 紙本着色 30.2×1769.0cm

江戸時代・文政9年(1826) QB-10795 徳川宗敬氏寄贈

従来の解剖記録に比べ、その精密さは格段に進歩しています。



予防医学への道

江戸時代には、医療の普及にともない、薬物について研究する本草学が発達しました。さらに西洋の博物学の影響をうけて、植物がもつ薬物としての効能に関し、高い知見が示されるようになりました。民間では、病気の予防のためにドクダミ、ゲンノショウコ、センブリなどが煎じ薬として広く用いられました。

麻疹、疱瘡(天然痘)、水疱瘡は一生に一度しかかからない病気で、これらを無事に済ますことが当時の人々の願いでした。『麻疹食物善悪鏡』は、麻疹が流行した文久2年(1862)に出された見立て番付で、食べてよろしき物に「犀角(サイの角)、たくあん漬、黒豆、ながいも」など、悪しき物に「魚鳥獣、貝類、麺類、酒、餅、きゅうり」などをあげ、湯茶を飲むことも禁じていますが、栄養状態が悪い当時は、肺炎などを併発し、命をおとすこともありました。

疱瘡は流行病の中でももっとも恐れられていた病気で、古くは疱瘡神がとりついて起こると信じられていました。享和3年(1803)にはイギリス人医師ジェンナー(1749～1823)の発見した牛痘接種法が日本に伝わりました。やがて幕府もその効果を認め、江戸の神田お玉ヶ池の種痘所を、万延元年(1860)に官立としたのです。蘭学弾圧の中でも予防医学に対する強い関心は衰えることなく、西洋医学に決定的な勝利をもたらしたといえます。

江戸時代の庶民は、医療について関心をもち、灸をすえたり、湯治に出かけたりして健康の維持につとめ、必要に応じて医師の診断を受けていた人が少なくありませんでした。

現代では薬や注射で手間をかけずに病気を治せると考えてしまいがちですが、江戸時代の人々のように、病気にならずに長生きするために日頃何をしたらよいかを考えることも大切ではないでしょうか。



13. 麻疹食物善悪鏡 Dietary Cure for Measles 紙本墨摺

48.7×36.1cm 江戸時代・文久2年(1862) QB-11513 徳川宗敬氏寄贈



参考図版 ジェンナー像

Edward Jenner

米原雲海作 銅造 高178.8cm

明治30年(1897) C-541

大日本私立衛生会寄贈